筑波学院大学紀要第５集　１～12ページ　　2010年

# 大江家政学における教養主義教育の実践
# －1925年４月～1928年３月

三石　善吉*

# Liberal Arts Education—Oe's Domestic Economy 1925～1928

Zenkichi MITSUISHI *

**Abstract**

This essay explores the original form of Oe's domestic economy from 1925 to 1928, with especial reference to the curriculum of Tokyo Kaseigakuin school, in order to examine her liberal arts education.

キーワード：大江家政学、東京家政学院、KVA、KA、リベラル・アーツ、一般教養

## はじめに

本論文の目的は、大江先生[1)]が東京家政学院の第１回生たちにどのような教育を行ったのかを明らかにするすることである。そのため、まず第１に、第１回生の1925年４月の入学時から、1928年３月の卒業にいたるまでの東京家政学院の制度的な変化をたどり、ついでこの３年間のカリキュラムの特徴を検討し、最後に、大江家政学における一般教養（リベラル・アーツ）教育の意味について考えることにする。

1906年８月23日英国留学からの帰国後の大江先生の事跡は、およそ次のようである。1906（明治39）年９月18日「女子高等師範学校（現御茶ノ水女子大学）」の家事科の授業を委嘱され、翌1907（明治40）年２月９日にはその教授となる（33歳）。1909（明治42）年10月５日、「東京女子高等師範学校（1908年奈良女子高等師範学校が新設されたため改称）」の教授、1925（大正14）年３月28日退官（51歳）。この18年間の女高師在職の間、大江先生は、周囲の無理解から反発・白眼視され孤高であったようだ。「理想の淑女を育てたい、自分の学校を持ちたい（大濱207頁）」と切望するようになる[2)]。

＊　学長、Tsukuba Gakuin University

１）本論考は、通常の学術研究論文ではあるが、東京家政学院の創立者である大江スミ先生の業績を顕彰する研究論文でもあるので、以下の叙述は、すべてこのように表記する。

## １．創立期東京家政学院の制度的展開－1925年４月～1928年３月

大江先生は、女高師の教授の傍ら、自分の理想を実現するために、1923（大正12）年２月１日、牛込区市ヶ谷富久町の自宅に、家政研究所を開設する。自宅付近の主婦やお手伝いさんなど25名ほどの私塾である（五十年史22頁）。

1925（大正14年）２月13日、東京府庁の「各種学校令」により「東京家政学院」設立の認可が下りる。その前後、苦心して建設費用を集め、その目途が立つと、1925（大正14）年３月28日、18年間勤めた女高師を退官する。麹町区三番町の新校舎は、1925（大正14）年４月15日に竣工する。大江先生は、イギリスの学校に匹敵しうる最新の設備を備えた校舎を作ろうと考え、当時の東京で最も設備の整ったモダンな学校を作り上げた（大濱211頁）。

校舎竣工の４日前、1925（大正14）年４月11日、東京家政学院の第１回入学式が行われた。『五十年史』（24頁）によれば、入学志願者は326名、入学者は273名となっているが、この日入学式に出席したものは、家政高等師範部83名〔128名入学〕、家政専修部51名〔84名入学〕、家事実習部47名〔61名入学〕、合計181名〔全273名入学〕となっている（五十年史30頁）。とすると、92名のものが、何らかの事情で入学式に間に合わなかったことになる。なお『五十年史』（506頁）には、1925（大正14）年「４月校章・校歌制定」とある〔これについては後に触れる〕。また1925（大正14）年５月21日には、創立記念祝賀会が催され、爾来この日が創立記念日となった（五十年史32頁）。

### １．１　創立第１年目－1925・４～1926・３

ところで、東京家政学院の創立時の状況について、1925年（大正14）年８月に文部省専門学務局学務課に提出した文書（「回答書」）には、いくつかの重要な情報が含まれている。以下、次の３点を取り上げる。

まず第１に、この文書（「回答書」）には「東京家政学院学則」が添付されており、その第１章総則の第１条に、東京家政学院の建学の理念が謳われている。すなわち「本院ハ、女子ニ高等ノ学問技術ヲ授ケ同時ニ趣味ヲ高メ感情ヲ精錬シテ理想的家庭ノ準備ヲナサシメルヲ以テ目的トス」とある。すなわち、これは、1925（大正14）年４月開学の東京家政学院の「建学の精神」が、学則による限り、「学問」・「技術」・「趣味ヲ高メ感情ヲ精錬」すること、であることがわかる。学問はKnowledgeに、技術はArtに、「趣味ヲ高メ感情ヲ精錬（スルコト）」はVirtueに当たろうが、まだ「徳」という言葉は出てこない。これについては、後に触れることになろう。

次いで、学則の第２章修業年限及学科目の、その第５条には、「各部ノ修業年限及学科目左ノ如シ」、とあり、以下の３部と修業年限と科目名とが挙げられている（五十年史25頁）。特に家政高等師範部の学科目については、後に検討する。

**家政高等師範部**

一、修業年限　３ヵ年

二、学科目　倫理学　教育学　憲法　民法　統計学　社会学　経済学　家政学概論　物理及化学　裁縫　割烹　家事実習　生理衛生　体操　（随意科）英語　唱歌

**家政専修部**

一、修業年限　２ヵ年

２）大江先生の職歴は大濱徹也『大江スミ先生』東京家政学院光塩会編集発行1978、（以下本文中で、大濱～頁と表記）、および『東京家政学院五十年史』学校法人東京家政学院1975、（以下五十年史～頁と表記）による

二、学科目　倫理学　教育学　家政学概論　栄養学　生理及衛生　物理及化学　裁縫　割烹　体操　（随意科）英語　唱歌

**家事実習部**

一、修業年限　一ヵ年

二、学科目　修身　家政学概論　裁縫　家事実習　体操

第３点として、学則の第３章毎週授業時数の、第６条には「各部ノ科目学習時間ハ左ノ如ク配当ス　但シ随意科ハ毎土曜日午前九時ヨリ十二時マデ之ニ当ツ　授業始終時間　午前八時～九時　午後三時～四時」とある。これによれば、授業は、朝八時に開始し、授業時間は例えば50分で10分休みとするなら、午前４時間、昼休み１時間として、午後３時間ということであろうか〔待考〕。また随意科は自由選択であろうから、例えば英語（２〔時間／毎週〕以下同じ）、唱歌（１）などといった配分で、双方の科目が取れるようになっていたのではあるまいか〔待考〕。

なおこの第６条には、上記３部の各科目の学年進行ごとの配当時間数〔数字は１週の講義時間〕が挙げられているので下記に示す。ただし、担当教員の姓名は明らかでない〔五十年史26頁。家政専修部と家事実習部は省略〕。

第一　家政高等師範部〔叙述の都合で下記の表を＜表１＞と呼ぶ〕

| 教科＼学年 | 第一学年 | 第二学年 | 第三学年 |
|---|---|---|---|
| 倫理学 | 二 | | |
| 教育学 | 二 | 二 | |
| 憲法・民法 | 四 | 四 | 四 |
| 統計学 | | | 二 |
| 社会学 | 二 | 二 | |
| 経済学 | 二 | 二 | |
| 家政学概論 | 二 | 二 | 二 |
| 物理及化学 | 二 | 二 | |
| 生理及衛生 | | | 二 |
| 家事実習 | 二 | 二 | 二 |
| 裁縫 | 和服六 | 洋服四　同左 | 同左 |
| 割烹 | 二 | 四 | 六 |
| 合計 | 三〇 | 三〇 | 二八 |

つまり1925年４月に入学した東京家政学院、高等師範部の生徒128名は、表の「第１学年」の13科目30時間を受けることになる〔憲法・民法や物理及化学等はそれぞれ２科目に分けた〕。

### １．２　創立２年目－1926・４～1927・３

創立２年目の1926（大正15）年４月26日、前年度の学則が新しく変更された。したがって、上記「回答書」に見られる学年進行のカリキュラムは、結局「第１学年」の１年間分だけが実施され、創立２年目は、上記「第２学年」に新たに開設された科目が加わることになる。その「学則の変更」は、以下の３点である〔五十年史28-29頁〕。すなわち、

①家事実習部の廃止。1926年３月、在学生60名の卒業と共に廃止された〔入学者数は61名〕。

②多様化された選科の新設。1926年４月から、６ヶ月間の和服選科、同洋服選科、１年間の日本料理科、同西洋料理科、同菓子科、同フランス刺繍科、同編物科、挿花選科（不定）、茶の湯選科（不定）、選科研究科（不定）など10余選科が新設・開講された。

③家政高等師範部・家政専修部の学科目名の変更と学科目の新規開設〔ただし以下家政専門部については省略〕。学科目の変更は、すなわち憲法民法→法制、物理化学→理科、家事実習→家事、唱歌→音楽であり、新学科目の開設は、修身・国語・時事問題の三科目である。「この中、学科目として新たに時事問題を加えたのは、社会的見識のある家庭婦人と女子教員とを育成したいという願いからであった」と『五十年史』（29頁）は伝えて

いる。

家政高等師範部の１回生（第２学年）と２回生（第１学年）の生徒は、この新カリキュラムに従って受講することになる。なお、1926（大正15）年４月には、家政高等師範部の第２回生、120名が入学している（五十年史28頁）。

1926（大正15）年12月25日大正天皇が崩御し、同日昭和と改元された〔昭和元年は12月25日から31日までの７日間である〕。明けて1927（昭和２）年２月28日、岡田良平文部大臣にあてて、東京家政専門学校の「設置申請書」が提出された。

### １．３　創立３年目－1927・４～1928・３

文部省「専門学校令」により、「東京家政専門学校」設置の許可が下りたのが、1927（昭和２）年７月23日〔五十年史37頁。但し同60頁には７月25日とある〕のことである。この時点〔７月下旬〕では、すでに東京家政学院・家政高等師範部の第１回生は３年目に入っており、1927（昭和２）年度の前期の授業を、ほぼ終えようとしている時期である。

この「設置申請書」（五十年史38頁以下）の中から、後の叙述と関係させて、次の３点を取り上げて考察する。第１点は「東京家政専門学校」の設置目的、第２は「東京家政学院」から「東京家政専門学校」へと移行する措置について、第３は新設専門学校の学科課程である。以下、この順に述べて行くことにする。

第１の点は、「東京家政専門学校」設置の目的である。「女子ニ家政ニ関スル高等ノ学問技芸ヲ授ケ同時ニ趣味ヲ高メ感情ヲ精錬シ以テ婦徳ヲ涵養シ理想的家庭生活ノ基準ヲナサシメ且家事科裁縫科ノ教員を養成するヲ以テ目的トス」と規定した。

比較のために、すでに紹介したが、「東京家政学院学則」第１章総則の第１条も示しておく。「本院ハ、女子ニ高等ノ学問技術ヲ授ケ同時ニ趣味ヲ高メ感情ヲ精錬シテ理想的家庭ノ準備ヲナサシメルヲ以テ目的トス」。つまり下線部「且」以下の教員養成の目的が付加されたこと、「趣味ヲ高メ感情ヲ精錬」することを「婦徳」という言葉で言い換えていることに留意しておこう。

２番目の、移行措置については、すなわち「現在ノ東京家政学院高等師範部ノ生徒ハ専門学校設置認可ト同時ニ試験ノ上相当学年ニ編入シ高等師範部ハ之ヲ廃止シ家政専修部ハ継続スル予定ナリ」とある。この「予定」にしたがって、1927（昭和２）年９月、「東京家政学院の前期の試験と前後して、高等師範部の生徒全員、つまり三年生（第一回生）、二年生、一年生に対して行われた。試験は、文部省から試験官が来校して厳重に実施されたが、その結果は、成績きわめて良好であった」（五十年史47頁）[3)]。

予定に従って「高等師範部ハ之ヲ廃止シ家政専修部ハ継続スル」わけであるから、1927（昭和２）年９月以降、東京家政学院は３年制の「東京家政専門学校」と２年制の「家政専門部」、および６ヶ月あるいは１年制の「選科」から構成されることになった。

第３の点、学科課程について、『五十年史』（41頁）に学年進行の科目配当の一覧「本科（学科課程）」があるので、それを以下に転写する。東京家政学院時代よりも各学年の授業

３）編入試験を受けた者は、1925年４月入学の第１回生128名（五十年史24頁）、1926年４月入学の第２回生120名（同左28頁）、1927年４月入学の第３回生106名（同左345頁。但しこの数字は編入試験後の在籍者数と思われる。待考）の、全354名（但しこれは入学者数、途中で退学した者も居ようから正確な数字ではない）である。他方卒業者数は、『五十年史』（346頁）によれば、１回生76名、２回生96名、３回生84名の全256名〔ただし同書59頁には、１回生83名、２回生91名、３回生85名全259名〕となっている。中途退学した者も居ようから、卒業者数が直ちに編入試験合格者数にはならないが、編入試はかなり厳しく全ての者が編入を許されたものではないようだ。

時間が、６時間から８時間増えている。東京家政学院・家政高等師範部の第１回生、第２回生、第３回生は、1927（昭和２）年９月に編入試験を受けて、東京家政専門学校のそれぞれの学年の後期に編入され、新しい下記に示すようなカリキュラムに従って、授業を受けることになった〔叙述の都合上、下記の表を＜表２＞と名づける〕。

| 計 | 音楽 | 社会学 | 経済 | 法制 | 理科 | 裁縫 | 家事 | 国語 | 教育 | 修身 | 体操 | 学科目／学年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 民法 | 応用物理 | 和服<br>手芸 | 家事概論<br>衣服整理<br>栄養学　割烹<br>時事問題 | | 国文<br>漢文 | 心理学<br>論理学 | | 国民道徳<br>作法 | 第１学年 |
| 三六 | 一 | | 二 | 二 | 一五 | 一〇 | | 二 | 二 | | 二 | 毎週時数 |
| | | | 憲法 | 応用化学 | 和服<br>洋服 | 住宅　割烹<br>看護育児<br>時事問題 | | 国文<br>作文 | 教育学<br>教育史 | | 実践倫理 | 第２学年 |
| 三六 | 一 | 一 | 二 | 二 | 一四 | 一〇 | | 二 | 二 | | 二 | 毎週時数 |
| | | | | 生理衛生 | 和服<br>洋服 | 衣服整理<br>割烹　園芸<br>整容法<br>按摩法<br>時事問題 | | | 教授法<br>管理法<br>教育法令 | | 倫理学 | 第３学年 |
| 三六 | 一 | 二 | 二 | 二 | 一四 | 一一 | | | 二 | | 二 | 毎週時数 |

上記の各学科の担当教員も「教員配当予定表」と「東京家政学院職員調」とによって判明する。割烹・刺繍・裁縫といった純然たる家政系の専門科目を除いて、一般教養の担当教員（兼任）の全てを列記してみる〔五十年史（42-45頁）。なお下記の表を＜リスト１＞と呼ぶ〕。

民　法　　東京帝国大学　穂積重遠
　　法学博士　毎週時数２、兼任
憲　法　　東京帝国大学　清水　澄
　　法学博士　　同上　２、兼任
社会学　　東京帝国大学　戸田貞三
　　同上　２、兼任
経済学　　英国オックスフォード大学　山崎宗直
　　ﾏｽﾀｰｵﾌﾞｱｰﾂ　同上　２、兼任
音　楽　　東京音楽学校　戸山國彦
　　同上　２、兼任
時事問題　　添田寿一
　　法学博士　　同上　１、兼任
時事問題　東京帝国大学　太田正孝
　　経済学博士　同上　15、兼任
倫　理　　東京帝国大学　野崎泰秀
　　文学博士　　同上　２、兼任
心理学　　東京帝国大学　増田惟重
　　文学士　　同上　２、兼任
栄養化学　東京帝国大学　照内　豊
　　医学博士　　同上　２、兼任
教育史　　東京帝国大学　阿部重孝
　　文学士　　同上　２、兼任
生理衛生　東京帝国大学　青木淳一
　　医学士　　同上　２、兼任
国語漢文　　松平康国
　　４、兼任
英　語　　カントレット恒子
　　？、兼任
茶之湯　　森 初之助
　　同上　２、兼任

| | | |
|---|---|---|
| 住宅論 | 東京帝国大学　工学士 | 遠藤於兎<br>同上　２、兼任 |
| 物理化学 | | 人選中<br>同上　12、専任 |

以上兼任講師16名中、東京帝国大学の教官が10名、そのほか時事問題の添田寿一〔1864～1929〕は東京帝国大学の政治学理財学科〔経済学〕卒業、大蔵官僚となり、台湾銀行初代頭取、1925年からは貴族議員で、財界の大物である。音楽は東京音楽学校〔現在の芸大〕の先生、国語･漢文の松平康国〔1863～1945〕は二松学舎・ミシガン大学卒業、明治24年からは東京専門学校講師として史学、漢文を教えていた。長崎県出身で大江先生とは同県人の関係であろうか。いずれにせよ創立期における東京家政専門学校の講師陣は、ほとんどが東京帝国大学の現役の教授陣によって占められており、注目に値する。

## ２．創立期における大江家政学の教育実践－1925年４月から1928年３月まで－

この節では、まず順序として、大江家政学の理念である、東京家政学院の「建学の精神」の成立に触れておかなければならない。次いで、1925（大正14）年４月に入学した東京家政学院第１回生の、1928（昭和３）年３月の卒業に至るまでの、３ヵ年間の具体的な受講科目を追ってみる。これによって、大江先生が建学の精神をどのような形で実現しようとしたのか、東京家政学院の第１回生たちにどのような学問を授けようとしたのかが、明らかになるであろう。

### ２．１　建学の精神 KVA の確立－1925年４月

『五十年史』巻末の年表の1925（大正14）年の条（506頁）に「４月校章・校歌（尾上柴舟作詞）制定」とある。校章とはKAをVで包んだ「薔薇の記章」のことである。この図案の成立過程については、『会誌』創刊号〔1930年５月発行〕所載の、高等師範部第１回生の、以下の文章に明らかである。すなわち、「創立間もない秋の或日、校長先生よりの御話で、私等一同が貧弱ながら本校の教育の理想を一つの徽章に表はしたいと、考案しましたのがこれでございます。即ちAKがVで包まれている図案でございまして、Kは知識（Knowledge）を、Aは技能（Art）を、Vは徳（Virtue）を表しております」（五十年史32頁）と。

文中の「創立間もない秋」を、『五十年史』巻末の年表は、上に見られるように、1925（大正14）年４月に繋年し、建学の精神を次のように敷衍している。「本学の建学の精神は、KVAの精神に象徴されている。前述のように、KはKnowledge、VはVirtue、AはArtの頭文字であり、そこに知識の啓発、徳性の涵養、技術の練磨の、調和的発展が期待されている。このKVAの精神は、大江スミの人柄と教養と経験とから生まれたもので、その人生観と教育観とであり、これを学院教育のモットーとされたのである」（五十年史34頁）と。

このKVA精神を生徒一人ひとりが骨肉化すべく、きわめて個性あるカリキュラムが用意された。以下の文では、東京家政学院の第１回生が卒業までの３年間に、どのような授業を受けたのか、年を追って考察してみよう。

### ２．２　創立１年目－1925・４～1926・３

まず、1925（大正14）年４月、家政高等師範部の第１回生の、１年次に配当された科目名と時間数とを、既述の学則第６条から再度抜き出すと、次のようである（五十年史26頁）。

倫理学（２時間／週、以下全て同じ）、

教育学（２）、憲法（２）、民法（２）、社会学（２）、経済学（２）、家政学概論（２）、物理及化学（２）、家事実習（２）、裁縫（和服６、洋服４）、割烹（２）、「随意科」として英語（２）・唱歌（１）[4]。体操（時間記載なし）。

全16科目中、家政学系の科目は下線部の５科目、16時間である。リベラル・アーツ〔一般教養〕科目は、それ以外の11科目14時間〔ただし体操を除き、かつ英語・唱歌どちらかを選択したと仮定すると15もしくは16時間〕と見てよいだろう。現在の学問範疇である人文科学〔倫理学・教育学・英語・唱歌・体操〕、社会科学〔憲法・民法・社会学・経済学〕、自然科学〔物理・化学〕の三分野の科目が、数は少ないけれども、きちんとそろっている。家政学専門の女子学校の１年次の教育課程であることを考えれば、リベラル・アーツ〔一般教養〕11科目14時間（あるいは15、16時間）、専門科目５科目16時間という配分は、今日から見ても、堂々たる「一般教養」のカリキュラムではあるまいか。ただし残念ながら、開学初年度の教授陣の陣容は、『五十年史』にも記載されていない。

### ２．３　創立２年目－1926・４～1927・３

次いで２年目、1926（大正15）年４月からの、家政高等師範部の第２学年（つまり第１回生）の履修科目は、すでに述べたように1926（大正15）年４月26日の「学則変更」によって、学科目名が変更され、かつ科目も修身・国語・時事問題の３教科が新規開講された。つまり、下記のようである（五十年史29頁）。ただし時間の配分は『五十年史』でも詳らかにしないが、開学年度（前年度）と同じと推定して、〔　〕内に記載してみた。

修身〔２時間／週〕、教育〔２〕、家事〔２〕、裁縫〔10〕、国語〔２〕、理科〔２〕、法制〔２〕、社会学〔２〕、時事問題〔２〕[5]、体操〔時間無記載〕、随意科として英語〔２〕、音楽〔１〕。

全12科目のうち、家政学系の専門科目は下線部の家事、裁縫の２科目12時間だけである。それに対して、人文〔修身・教育・国語・体操・英語・音楽〕、社会〔法制・社会学・時事問題〕、自然〔理科〕と言ったリベラル・アーツ〔一般教養〕系が10科目〔体育は不明、随意科の英語、音楽いずれかを選択したとして〕、16あるいは15時間であり、一般教養〔リベラル・アーツ〕系が、科目の上でも配分時間の上でも、依然優勢である。

特に、新しく開設された「時事問題」について、大濱〔214頁〕は、「‘時事問題’をはじめとせる高い教養主義に色どられた科目の充実」に注意を促している。また『五十年史』も、1925年４月の開学時の状況を述べる文脈の中で、「教科課程の編成については、特に一般教養の科目を重視し、その道一流の学者を招聘し、毎週二時間つづきの充実した講義を聞かせた。また他校に見られない学科目の一つに時事問題と宗教講座があり、月曜日の五、六時限がこれにあてられ、太田正孝、添田寿一、芦田均、高倉徳太郎、中山昌樹、今井三郎の諸先生が、それぞれの分野を担当された（31-32頁）」と記載し[6]、また『五十年史』は、既に引用したが、「この中、学科目として新たに時事問題を加えたのは、社会的見識のある家庭婦人と女子教員とを育成したいという願いからであった」（29頁）とも指摘している。

---

４）英語と唱歌をこのような時間配分にした。本文３頁左側参照。

５）時事問題の配当時間も未詳。ここでは下記本文中の引用文「毎週２時間続き」（五十年史31―２頁）を参考にして、毎週２時間とした（五十年史29頁）。ただし＜リスト１＞によれば、時事問題は添田＋太田両教授が担当して、合計16時間となっている。家政専門学校の１年から３年、家政専修部の１年と２年のすべてを担当しても10時間である。６時間分の行方については待考〔特別講義として６時間置かれたか？〕。

### ２．４　創立３年目－1927・４～1928・３

創立３年目、東京家政専門学校の第１回生〔つまり1924年４月東京家政学院・家政高等師範部１年生として入学した第１回生〕の最後の年である。前期は上記「創立２年目」（前年度）と同じ東京家政学院・家政高等師範部のカリキュラムであるが、後期からは新しく編入した東京家政専門学校の学科課程となる。

1927（昭和２）年４月〔から９月まで〕の科目一覧は、上記（創立２年目）と同じであるので省略する。後期分のカリキュラム、つまり東京家政専門学校の「第３学年」の「学科課程」は、『五十年史』（41頁）ですでに紹介したので、ここでは、科目名と毎週の時間数だけにとどめる。

「本科（学科課程）」の「第３学年」の部分（五十年史41頁以下）

> 倫理学（週２時間。以下同じ）、教授法･教育法令･管理法（三教科で全２）、衣服整理・割烹・園芸・整容法・按摩法・時事問題（六教科で全11）、和服・洋服（14）、生理衛生（２）、経済（２）、社会学（２）、音楽体操（１）、全36時間。

この科目群を、純然たる家政系と人文・社会・自然系との４分野に分けたいが、どこに分類すべきか迷ってしまう科目がある。整容法とは、お化粧のことであろうか、着付けなどの身だしなみを言うのであろうか、これを家政系に入れてよいのだろうか。また按摩法は、医学に含めてよいのだろうか。また、異なった分野に見える、「教授法･教育法令･管理法」は、おそらく東京帝国大学の「教育史」専門の阿部重孝教授が一人で担当していると仮定する〔待考〕。

ともあれ、家政系として下線部の〔衣服整理・割烹・整容法・和服・洋服〕の５科目20時間、人文系として〔倫理学・教授法・教育法令・管理法・音楽・体操〕の６教科５時間、社会系として〔時事問題・経済・社会学〕の３教科６時間、自然系として〔園芸・按摩法（１時間とする）・生理衛生〕３教科５時間、３分野全体で16時間である。家政学系の専門学校の最終年度で、家政系の専門科目20時間、一般教養科目16時間と言う配分は、教養科目に比重が置かれすぎていると考えられる。大江先生はいったいなぜ、このような教育を生徒たちに授けようとしたのであろうか。

## ３．KVA と KA

芝沼晶子論文[7)]によれば、安井てつ東京女子大学学長が「人間としての人格を育てるリベラル・エデュケーションを女子教育の理想とする立場」であったのに対して、大江スミ東京家政専門学校校長は「家政を中心にした女子教育」で、「目標を良妻賢母の育成」に置いたとして、両者が「対照的な女子教育観を確立」したと述べている。

しかしながら、すでに前節〔第２節〕で検

6）1927（昭和２）年の「東京家政学院職員調」〔五十年史43頁〕と1936（昭和11）年の「学科担任講師」〔五十年史62頁〕の二つの資料は、その年度の全教員を網羅しているようである。ここに列挙されている太田正孝から今井三郎までの６講師のうち、太田講師は両者に、添田講師は前資料に、中山講師〔修養講座〕は後資料に登載されている。今井･高倉の両宗教者、および芦田講師の名前は双方にない。ただ芦田均講師は、大濱216頁「教師陣のサイン（昭和19年）」に、太田正孝・穂積重遠・山崎宗直〔前資料〕、大島正徳・池田亀鑑〔後資料〕と並んでサインしている。太田・穂積・山崎の帝大教授は、ほぼ開学時からずっと家政学院の非常勤講師を勤めていることになる。

7）芝沼晶子「大江スミの留学したバタシー・ポリテクニック」所収『敬和学園大学研究紀要』第13号2004年。なお安井てつ（1870～1945）、女子高等師範卒、オクスブリッジに留学、教育学･心理学を学ぶ。新渡戸稲造初代学長を継ぎ、1923～40年まで、第２代東京女子大学学長。

討してきたように、大江先生もまた、東京家政学院、あるいはまた東京家政専門学校においても、極めてリベラル・エデュケーションを重視した「教養主義」に彩られた教育を行ってきたことが判明した。

### ３．１　大江先生の教養主義の源泉

大濱『大江スミ先生』〔214頁〕も、「‘時事問題’をはじめとせる高い教養主義に色どられた科目の充実」に注意を促していた。『五十年史』も「このKVAの精神は、大江スミの人柄と教養と経験とから生まれたもので、その人生観と教育観とであり、これを学院教育のモットーとされたのである」(34頁）と述べていた。

大江先生のこの「教養主義」を端的に表現しているのが、「建学の精神」・「K知識・V徳性・A技術」のうちの、とりわけ「K知識」と「A技術」の重視である。大江先生の「KVAの精神は、大江スミの人柄と教養と経験とから生まれたもの」（五十年史（34頁））と指摘する、上記の引用を再度想起ありたい。大江先生は、独自の英国「体験」と自らの「人柄と教養」から、やがて建学の理念ともなる「K知識」と「A技術」の重要性を、まずは英国留学から学んだのである。

大江先生の英国留学中の体験は、二つの種類に分けられよう。一つは講習会・学校見学・集会・会議への精力的な出席である。もう一つはベッドフォード・スクエア女子大学とバタシー工科専門学校での授業体験である。

前者について言えば、大江先生は、1903年８月には24日間の「オックスフォード講習会」に、また翌年夏には同じく１ヶ月近くの「ケンブリッジ講習会」などに出席、1904年11月にはヨークで開催された「大英国婦人教育大総集会」に、翌年早々にはリバプールでの「教育家大集会」に出席している。また、アイルランドの大学、ロンドン大学、ケンブリッジ女子大、各地の家政学校、はては大陸のベルリン、ブリュッセル、アムステルダムに渡って教育施設などを精力的に見学している〔『光塩　51』(March 2002 p19）に詳しい〕。大江先生の「KVA」は、学校教育以外の、このようなさまざまな会議や集会、あるいは見学などによって培われたものと思われる。

さらに英国における学校教育での「体験」は、「KVA」とりわけ「K知識とA技術」重視の形成に直接的にかかわってくる。一つは、ベッドフォード・スクエア女子大学Ladies College in Bedford Squareでの、前後２度に及ぶ14ヶ月間の「体験」である。この大学は、1849年エリザベス・J・レイドElizabeth・Jesser・Reidによって創立された。女性のためにより高度な教育を授けることを目的とした、イギリス初の女子大学である[8)]。その女子大の「創立の趣旨は、女性のための、自由な、宗派にとらわれない教育a liberal and non-sectarian educationを授けるにあった」とその校史が述べているように、この大学の教育理念は、人種・宗教・政治的信条にかかわりなく、自由で幅広い教育、「リベラル教育」を方針としていたことである。この大学で大江先生は、英国におけるいわゆる「リベラル・アーツ教育」の一端を体験する。

学校教育体験の二つ目は、もちろん大江先生が英国留学での主要舞台とした、バタシー工科専門学校Battersea Polytechnicでのそれである。同校は、ロンドン市〔SW11〕内のBattersea Park Roadに設立され、創立時、機械工学と建築業、電気工学と物理、化学、女

8）See Royal Holloway, University of London、University of London/Colleges/Institutes、from Wiki: Bedford College（London）など同カレッジに関する豊富な興味ある資料を参照せよ。なお同校は、1900年にはロンドン大学に統合されBedford College for Womenとなる。

性学 Women's Subjects、芸術、音楽などの 6 学部〔six departments〕からなり、ロンドンの余り裕福ではない階層 poorer inhabitants の子弟にもっと高度な教育を授けることを目的に創立され、1894年 1 月に第 1 期生を迎え入れていた[9]。

1894年の開学と共に、Women's Subjects〔Women's Studies との表記もある〕学部では、11名の新 1 年生を擁して teacher's training school が発足していた[10]。大江先生は、この学校に1903年 9 月15日に入学し、1905年 7 月21日に卒業している。バタシー校の歴史を綴った＜ The Battersea Years 1891－1966＞によれば、「この Training School は家政学の'すべての科目にわたる' フルタイムの教師訓練コースの先駆けであって、'理論と実践教育の教授、実習室教育での科学的作業' も含まれていた」と言う。つまり、大江先生は、この学校で「episteme 知識と techne 技術」[11]、つまり「theoria 理論と praxis 実践」すなわち今日的に言えば、「theory 理論（知識）と practice 実践（技術）」の融合の実際を、しっかりと体験したのである[12]。

### 3．2　＜知識と技術＞の重視－その先駆性

大江先生は、帰国後この英国体験をおのれの家政学の中核に据える。大江家政学の成立過程を論じて卓抜な関口敏美論文[13]によれば、大江家政学における「理論と実地」つまり「智識と技術」の重視は、早くも『家事実習教科書』（1910）に見える「理論ありての実地」と言う考え方に、またトリアス「知識・徳性・技術」の原型は、『三ぽう主義』（1911）に見える「智識を広め」・「婦徳を備え」、「実地練習」にあるとされる。

大江先生が意識していたか否かは別にして、これまで触れてきたように、＜ KVA ＞の中の＜ KA ＞の二文字は、K 知識・V 徳性・A 技術という個別的な三つの徳目とは別の、一つのまとまった概念、すなわち遠く古典ギリシャにまで遡る「episteme 知識と techne 技術」つまり「theoria 理論と praxis 実践」を表すものである。

すなわち＜ Knowledge ＞はギリシャ語＜エピステーメー episteme 知識＞の英語訳、英語の＜ Art ＞も同じくギリシャ語の＜テクネー techne 技術＞の英語訳である。またギリシャ語の＜ episteme ＞は、＜ science（s）知識＞とも英訳されるから、本学の＜ Knowledge 知識＞は、英語の＜ Science（s）知識＞と同じく、本をたどれば同じギリシャ語＜ episteme 知識＞にたどり着くことになる。

つまり本学の＜ Knowledge 知識 and Art 技術＞は、いわゆる教養学部の英語名である＜ Faculty（College）of Arts and Sciences ＞の

9）from University of Surrey Archives, Guildford。同校の department はその規模から学部と考える。なお、同校は、1894年の開学時には Battersea Polytechnic Institute と呼ばれていたが、1898年には Battersea Polytechnic と校名変更している。

10）AIM25: South Bank University: Battersea College of Education、および The Battersea Years 1891–1966（166–201 Chapter4、portal. Surrey. ac. uk/ pls /portal/url/ITEM/）

11）See Stanford Encyclopedia of Philosophy: episteme and techne. クセノフォン、プラトン、アリストテレスからプロティナスまでの両概念の使用法について詳細に論じている。

12）ベッドフォード・スクエア女子大が「リベラル教育 liberal education」を重視したことは間違いのない事実ではあるが、出来たらこの女子大のカリキュラムなどや、また大江先生がこの大学で学んだ際の履修課目などが判明すると事態はもっとはっきりしよう（待考）。またバタシー工科専門学校で、大江先生がどのような科目を実際に履修したのか、またこのバタシー校のカリキュラムを調べて、どのようなリベラル・アーツ科目があったのか、確認する必要がある（待考）。

13）関口敏美「大江スミにおける家政教育論の形成と展開」所収『奈良女子大学文学部教育文化情報学講座年報』第 3 号、1999年。

＜ Arts and Sciences ＞とまったく同義であることになる。この＜ K 知識・A 技術＞は、＜ Arts 技術 and Sciences 知識＞と同じく、欧米においては、「知識（＝理論）と技術（＝実践）」を中核にすえた、幅広い一般教育・一般教養すなわちリベラル・アーツ教育を指すものであった。

普通の英和辞典〔『新英和大辞典』第５版、研究社1986〕では、＜ liberal arts ＞は、「（近代以降の大学の）一般教育科目（専門科目に対して、一般的知識を与え、広く知的能力を発達させる目的の語学・自然科学・哲学・芸術・歴史・社会科学などを指す）」と説明されている。この辞典での科目の例挙の仕方は、あまり体系的ではないが、要するに人文科学〔哲学・歴史・語学・芸術など〕、社会科学〔この英和辞典では挙げられていないが政治学・経済学・経営学・法律学・社会学〕、自然科学〔例を挙げれば物理学・化学・生物学など〕を含む、一般的教養教育を指す。

1636年創立のハーバード大学の＜ Faculty of Arts and Sciences ＞はもちろん、19世紀半ば、1847年創立のイェール大学の＜ Graduate School of Arts and Sciences ＞を想起されたい。繰り返すが、本学の＜ Knowledge and Art ＞は、この教養学部の＜ Arts and Sciences ＞と、全く同義なのである。

戦後の教養学部〔Faculty（College）of Arts and Sciences〕の伝統は、旧制ナンバースクール〔帝大への予備教育の大学予科課程〕の伝統を引く駒場東大と、1953年に開学された国際基督教大学（ICU）を代表とする、アメリカのリベラルアーツ・カレッジの系統を引くものとの二つの流れがある。

大江先生は大正デモクラシー期のモダニズムを全身に浴びて、恐らく一つは、大江先生の「先輩であり師でもあった安井てつ」（大濱79頁）の「リベラル・エデュケーション思想」の継受、もう一つは、大正デモクラシー期の「（旧制）高校の教養主義」の影響を深く受けつつ、他方自分がイギリス留学中にふれたイギリスのリベラル・アーツの伝統とを、家政学院の教育理念・教育方針に取り入れたと考えられる。それが「K・A」の重視であり、1925年４月、学生の考案した、三つの V〔バラの徽章はゆるやかな三角形をなしているから V は三つと考える（待考）〕で、この KA を包むデザインに、大江先生は同意したのである。こうしてここに、今日の「バラの記章」のデザインが、時代を先取りする「象徴」として確立されたのである。

本学における「K 知識・V 徳性・A 技術」の重視は、戦後1947年４月１日施行の「学校教育法」第52条「大学の目的」に言う「知的・道徳的・応用的能力」という大学の「三つの目的」と比べて、「技術」に注目している点

14）最後になるが、大江先生の英国留学までの略歴をたどっておく。（旧姓）宮川スミ、明治８年（1875）９月７日、現在の長崎市十善寺十人町生まれ。父宮川盛太郎はグラバー邸に奉公し、主人グラバーが三菱汽船の顧問として上京した際に随従、その口利きで海軍省に職を得るが、後に大隈信重のつてで宮内省に勤務。1880（明治18）年、一家上京、芝栄町に住む。長男兵市、長女トク、次女スミ、三女エヒ、二男隆吉、三男謹治。スミは1889（明治22）年１月、東洋和英女学校（カナダ・メソジストの経営）に入学、1894（明治27）年12月卒業。1897（明治30）年９月女子高等師範入学、1901（明治34）年３月卒業。同年４月沖縄県高等女学校教員を命ぜられ赴任。1902（明治35）年８月、文部省から家政研究のため３年間のイギリス留学を命ぜられる。大江先生の英国留学は、1902（明治35）年10月東京を立ち、同年12月末ロンドン着、1903（明治36）年１月から７月までロンドンにある「家政練習所」で洗濯法、料理法、裁縫を学ぶ。1903（明治36）年１月19日から同６月23日までベッドフォード・スクエア女子大学で衛生学を学ぶ。さらに1903（明治36）年９月15日から1905（明治38）年７月21日（卒業）までバタシー工科専門学校で料理、衣服製作など学ぶ。「日露戦争で留学が一年間のびたことを幸いに」〔大濱89頁〕、1905（明治38）年９月から、1906（明治39）年７月７日（卒業）まで、再度、ベッドフォード・スクエア女子大学で公衆衛生学を学び、1906（明治39）年８月23日〔大濱、年譜では８月３日〕、帰国している。３年10ヶ月ほどの英国留学であった。

で、21世紀の科学技術時代にふさわしい標語として、大江先生の思想の先駆性が伺われるものである。

なおまた1925年４月11日開学の東京家政学院における「＜知識と技術＞ Knowledge and Art」の重視は、1949年５月31日設立の駒場東大の教養学部 The University of Tokyo Graduate School of Arts and Sciences の「＜技術と知識＞ Arts and Sciences」に先んずること24年、また1953年４月１日開学の国際基督教大学 ICU〔１学部１学科〕の、教養学部 The College of Liberal Arts、アーツサイエンス学科 The Division of Arts and Sciences の、「＜技術と知識＞ Arts and Sciences」に先んずること28年、大江先生[14)]の卓見に敬服するものである（以上）。